

海外の有用海藻資源を開拓した角谷株式会社の角谷 清氏を想う

大野 正夫



2015年頃より地球温暖化で、寒天、アルギン酸の天然産原料の減少が深刻になっている。筆者は、天然産海藻枯渇の回復手段は養殖であると、世界の海を調査している。

このような時、1950年代から、ひとりで世界中を旅して有用な海藻を見つけ輸入し、日本の海藻産業の基盤を作った故角谷 清さんが偲ばれる。

2007年3月に、19回国際海藻シンポジウムが神戸で開催されたが、角谷さんは、このシンポジウムの開催を楽しみにしていた。残念ながら前年10月に逝去した。享年86歳であった。「療養中で寄付集めが出来ない」と100万円の寄付が、生前に奥様より実行委員会に届いた。

シンポジウム開会式で、シンポジウム会長から、感謝状を、長らく角谷さんと共に仕事をされてきた篠原さんに渡された。

1983年中国青島で開催された国際海藻シンポジウムで、養殖オゴノリを見る角谷 清さん

生前、角谷さんが日本海藻協会の「海藻資源」に書かれた記事とお聞きしていたことから、彼の海藻産業に関わる活動を記述する。

角谷商店株式会社は、1922年に神戸で創業された貿易会社である。神戸の貿易会社が集まっている貿易ビル(現在は貿易センタービル)のなかに彼の会社があった。角谷商店は樟脳や“はっか”などの天然物を輸入する専門商社で、日本から寒天を輸出していた。第二次世界大戦前は、寒天は日本の独占輸出品であり、海外では細菌培養の寒天培地に使用され、重要な輸出品であった。戦時中に戦略物質に指定されて、敵国輸出ができなくなり、欧米諸国は困り、寒天製造研究が進み、オゴノリからアルカリ処理による寒天が、米国で1941年に生産された。ただ、オゴノリをアルカリ処理すると寒天になることは、日本人の発明で、論文になっていた。この論文を入手して、オゴノリ寒天が、米国やデンマークで生産されるようになったと言われている。ドイツには、確実に寒天が届くために潜水艦で輸出した。当時、角谷氏は神戸高等商業学校(現神戸大学商学部)の学生であり、英語での商談を聞いたそうである。

戦後は、いち早く、独自にGHQとの輸出交渉に関わり、1946年早々から、寒天の輸出が始まった。寒天産業は、戦後復興産業の先達になり、国民の食料確保のための外貨獲得の第一線の戦士として働いているとやりがいがあった。国内の寒天の製造も増大し、その頃は1ドル360円時代であったが、儲けさせてもらった。現在の世界に広がった寒天産業は、日本の誇る技術移転であった。

寒天の製造の増大により、原料海藻の輸入も始まった。1958年に寒天原藻のテングサ(天草)より始まった。当時、テングサの価格の高騰に悩む寒天メーカーのために、少しでも安い原料を供給したいと思った。原藻輸入の自由化を夢みていたので、彼は通産省当局に働きかけ、1953年より、テングサをAA品目にしてもらったことから、輸入促進ができる原因となった。当時の担当官の英断に

感謝していると語った。テングサの資源を求めて、スペイン、ポルトガル、モロッコの海岸を歩き、相当量の資源があることがわかり輸入を開始したという。

片言のスペイン語で、現地人との交渉は、楽しい思い出になっているという。だんだんとスペイン語、ポルトガル語、フランス語が、話せるようになった。現地人との交渉は、現地人が話す言葉を使うことで、交渉がうまくいった。3か国のなかでモロッコ産のテングサが最も生産量が安定しており品質も優れていた。このような原藻を集めは手探りであり、生産地を歩いてコツコツとデータを集めていったが、冒険旅行のような気分も味わった。

商法の改定により、角谷商店の称号は替わり、角谷株式会社となった。南米のオゴノリの輸入に関しても、よく海岸を歩いた。特にチリ産のオゴノリは、きわめて生産量が多く、日本へ大量に輸入されるようになった。最大時には、輸入量が1万トンにも達し、会社の輸入品目としても大きな割合となった。その後、円高の進行で日本での寒天生産量が減少した結果、オゴノリの需要が大幅に減少してゆき、多様品目の輸出入業時代になった。

アルゼンチン、ブラジル、ペルーからも寒天原藻の輸入は行ったが、しばしば、産地を訪れた。品質は良いものであった。残念ながら生産量はあまり多くなく、米国に近いせいか、米国寒天会社が購入し、価格が比較的高いのが欠点であった。潜在資源として年間2000トンはあると推察しているので、将来、テングサの有望な供給国になるだろうと云われた。角谷商法は、行き中古車を輸出をして、帰り便で海藻を運んだと言われたが、どのようなことか筆者には理解できない。

1963年よりアルギン酸ナトリウムの原料である褐藻のカジメ、レソニアの輸入へと拡大していった。1975年に、チリよりレソニアのアルギン酸成分の分析依頼があり、日本のメーカーで、サンプルをテストしたところ、良質であり、メーカーとともに喜んだ思い出があると言われた。メーカーとは、(株)キミカの事と思うが、角谷さんがレソニアを持ち込んだことは興味深い。彼らしい。角谷商店との取引がなかった。

1990年から新しい海藻資源の開発に力を注いだのは、海藻サラダの原藻であった。海藻サラダの主要な原藻はワカメであり、ワカメ以外の赤い色合いの紅藻がほしかった。トサカノリが入れられていたが、安いサラダの赤色付けにスギノリを考えて、ギガルテイナ *Gigartina* をトサカノリの代用品、商品名「とさかもどき」として、チリから輸入し、国内の販路も飛躍的に伸びた。しかし、その後韓国の業者が参入して原藻の価格が狂乱相場になったが、ブームが去って、一定の需要を日本市場で獲得できた。海藻の種類もスギノリ類以外に、ツノマタ、ダルス、ヒバマタ類などを勧めていた。今、多くの海藻サラダに入っている養殖ツノマタは、カナダで養殖されたものであるが、角谷さんが、最初に日本の海藻サラダ用に紹介した。

角谷清さんが逝去して、息子が会社を引き継いだ。海外を飛び回ることが、体力的に無理になり引退した。その後、角谷株式会社について情報が途絶えていた。今年、2024年1月に国連、UNDPの南アフリカ事務局から、日本の寒天市場調査の依頼を受けて、伊那食品工業(株)に聞き取り調査をお願いした時に、寒天原藻の輸入先を紹介された。

南アフリカのテングサの輸入は、現在、神戸のKDIトレーディング株式会社であると紹介された。細田洋介社長は、角谷清さんとともに仕事をしていて、息子さんが退けられて、上記の会社を再

編して、伊那食品工業(株傘下の会社になり、現在も海藻の輸入を主にしていることが分かった。

角谷 清さんが、占領下のなかで、GHQとの交渉に奮闘して、1946年早々に寒天の輸出品目としての許可を得たことは、長く記録に残さねばならない。この事とは、外貨獲得に貢献し、寒天産業の振興に大きく寄与した。彼は1971年に日本復興の象徴として札幌で開催された第7回国際海藻シンポジウムに参加して以来、欠かさず国際海藻シンポジウムに参加して、世界各国の海藻産業界から大学教授まで、幅広い人脈を作った。

1983年に中国復興の象徴として、第11回国際シンポジウムが青島(チンタオ)で開催された。まだ中国では文化革命動乱が終わった直後であり十分な基金がなく、シンポジウム母体の国際海藻協会の評議委員であった東京教育大学西澤俊一教授に、日本へ200万円寄付の要望があった。そこで、当時山本海苔店研究所所長の大房 剛さんと角谷さんは、国際海藻協会日本支部という団体を立ち上げて、寄付集めに奔走し要望額を中国に送った。この組織が、後年、日本海藻協会となった。

日本からの渡航はビザが必要であり、青島シンポジウム参加ツアーが作られた。20名ほどの団体となり、北京に降り立って観光もして、列車とバスで青島に向かった。筆者は、たまたま、最初の日に、バスで角谷さんと同席した。その後、シンポジウムから帰国まで角谷さんと一緒にいる時が多かった。彼から日本の海藻産業の事情を詳しく聞く機会であった。これが機縁で、西澤先生、大房さん、角谷さん、有賀先生と日本海藻協会の組織づくりとなった。海藻産業界では、「角谷の親父さんから、頼まれれば、受けざるを得ない」と言われる人柄であった。

このようなことを書いているのを天上より、微笑んでいるだろう。ご冥福を祈念します。